

より豊かな人生のパスワード フォーラム「ワーク・ライフ・バランス」

11月28日、浦添市男女共同参画推進ハーモニーセンターで、「ワーク・ライフ・バランス」をテーマにフォーラムが開催されました。コーディネーター・パネリストは次のとおりです。コーディネーター宮城公子（沖縄大学准教授・浦添市男女共同参画審議会委員）パネリスト①新垣幸子（沖縄県信用保証協会会長）②慶田城健仁（琉球新報社中部支社長）③真境名エリ子（浦添商工会議所女性会会長）④金城和幸（学習塾ベガサス系満西崎教室塾長）。

「ワーク・ライフ・バランス」について、ご自身の体験を絡めてお話しください。

私の働き方は、ライフの部分が足りなかった企業戦士、「ワーク・ライフ・バランス」ということでは、バランスのとれていない反面教師です。私が、長い期間どうして働き続けられたか。ひとつは、自己実現のため、もうひとつは、働くのが当たり前で、経済的に自立している女性が多い糸満出身であるということも影響しているのかもしれない。当時県庁の出勤時間は8時で

したから、6時50分発のバスで通勤です。子どもを保育所に預けるのは、一番、迎えに行くのは後というような状況でした。

「この子たちが大きくなったら、いいことがあるからね」と励まされたり、隣近所の方に保育園への送迎をお願いしたり、ほんとに地域の方には支えてもらいました。児童福祉の部署に配属されたとき、6時までの保育時間延長、夜間保育の実施に関わりました。自分の経験上、利用しやすい保育所のあり方、安心して働ける仕組みを考えたい結果です。

私は新聞社で働くようになってから、30年になります。結婚

当時は「あの家は母子家庭？」と言われるような働き方でした。働き方、生き方が変わったのは、宮古に転勤してからです。宮古支社では、職場と家庭が同じ場所。家族4人でやる



ことが多く、楽しかった。ここで、仕事一筋ではだめだと反省しました。気づいてみると、妻は自分の世界を持ち、物書き、運動を始めました。現在私は、ハードウオッチングをはじめ多趣味です。長女は新聞記者、息子はバリ島ガムランの演奏者、それぞれの個性を大切に、暮らしを楽しんでいる。「お金はないけど、個性はある集団」で仕事も暮らしも一杯楽しんでる。これが我が家です。

両親は共働きでした。目を覚ますと両親はいなくなりました。学校から帰ってくる時も両親はいない状況だったので、家政婦さんを雇っていました。「どうしてそんなに働くのかな」と思っていました。けれど、今なら母親の気持ち

「お父さんと一緒」というコラムを新聞に掲載したことが縁で、パネリストとして参加しています。10年間国家公務員でした。当時霞ヶ関の職場は、残業すればするほど仕事ができ優秀というような雰囲気でした。仕事にやりがいを持って辞め、今は、小さな塾の経営者です。妻が働くことになったとき、二人で話し合い、保育所に預けるのではなく、夫婦で育児をすることになりました。次女には「昼も夜もお父さんが働けばいい」と言われたものです。平日、昼は妻が仕事で夜は私が仕事ですから、すれ違いにな

らないように会話を大切に、妻の愚痴もよく聞いています。それから、「家飲み会」を開き、和気あいあい家族の団らんを楽しんでいます。

努力を要しました。今回の国政選挙で女性議員の比率が高くなりました。そのことが政策に活かせることを期待しています。夫は定年後、家事を引き受けて、この10年間私を支えてくれています。家族の支えと同時に、女性が社会に出て、積んだキャリアをつぶさないように支える地域が必要

女性性は自分と夫とのワーク・ライフ・バランスを考えますが、男性は仕事と趣味のワーク・ライフ・バランスになりがちです。専業主婦の場合やりたいことがあっても、夫にお願いすることが必要になるので、パートをして自分でお金を稼ぐのもいいのではないのでしょうか。自分のために使う時間をつくるのも大切です。

神奈川県では、残業すると人事評価にペナルティがつく。その方が社会も活力がでると思う。私も、生活をインジヨイしながら、もう少しゆるやかに仕事をしていければよかったと思う。

私の家ではお互いの理解が進んで、家事を分担しなくなり、今では手の空いている人が自然にやるようになりました。妻には「父親にしか出来ないこと、あなたにしか出来ないことをちゃんとやっているよね。」と言われ、褒め言葉だと受け取っています。

私には定年が来ます。しかし物書きをしています。妻には定年がありません。妻のワークの妨げにならないようにしたいと思っています。妻の小説には、私らしい人物が今は風来坊のように描かれているが、かっこよく書かれるようにしたい。今後何をしていくかが、テーマです。老後に備えているいろいろチャレンジしたい。

私は、妻へ「社会へ出て働くことの意味」を伝えきれないほど優秀な人間ではありません。ですから、妻が社会に出て学んできてくれることがいいと思っています。

新報社に育児ルームができたのは、新社屋が出来てから。会議室の一室をそこに充てました。記者をしながらの育児は難しい。でも女性記者は増えているので、環境を整えていかなければならない。しかし、まだ十分ではない環境では、介護で辞めざるを得ない人が出ています。その結果、優秀な女性記者がフリーで働いています。現役で、家事・育児をしながら記事が書ける職場にしたい。

女性が働く意義、意味について

世の中の仕組みを変えていくのに女性の視点が必要です。保

育行政を担当したときには、「君がこの部署に入ってきたから、注文が多くなって、かまひすしくなった」と言われ、仕組みを変えていくのに

働き続けるための仕組みについて

日本人の働き方は変化してきている。問い直す時期にきてい

当社には50名の従業員がいます。結婚が理由で仕事を辞める

参加者の声

・お互いの時間や能力について配慮しながら、心地よく過ごせるようにしていきたいと思えます。また、バランスをとるための具体的なスキルも分かり、得した気持ちになりました。
・男女の完全な平等は無理。お互いの役割を尊重することが大切だと思う。
・我が家の我が身を反省。



宮城公子氏
沖縄大学准教授
浦添市男女共同参画審議会委員



新垣幸子氏
沖縄県信用保証協会会長



慶田城健二氏
琉球新報社中部支社長



真境名エリ子氏
浦添商工会議所女性会会長



金城和幸氏
学習塾ベガサス系満西崎教室塾長

問い合わせ
男女共同参画推進
ハーモニーセンター
☎874-5711